

イチゴ「ベル・ルージュ」の露地栽培における不織布の効果

北山美子・岩瀬利己・大場貞信*

(青森県畑作園芸試験場・*青森県農業試験場)

Effects of Contacting Row Covering with Nonwovenfabulic of Strawberry Variety 'Belle Rouge'

Yoshiko KITAYAMA, Toshimi IWASE and Sadanobu OHBA*

(Aomori Field Crops and Horticultural Experiment Station・*)
*Aomori Agricultural Experiment Station

1 はじめに

青森県内のイチゴ栽培は、主にハウス半促成、促成栽培が行われているが、高冷地を中心に、面積は少ないものの6月中旬～7月中旬出荷の露地栽培が行われている。露地栽培の品種は従来、「盛岡16号」が中心であったが、近年「ベル・ルージュ」へと切り替わりつつある。そこで、9月定植の露地栽培において、「ベル・ルージュ」を供試して、定植後からの不織布のじかがけ処理が、花房数、収量、及び品質等に及ぼす影響について検討した。

2 試験方法

- (1) 試験場所 青森県畑作園芸試験場
- (2) 試験年次 1989年～1992年
- (3) 試験区の構成
 - 1) 供試品種 ベル・ルージュ
 - 2) べたがけ資材 パスライト^R
 - 3) 不織布じかがけ処理期間 表1のとおり

表1 不織布じかがけ処理期間

年次	不織布じかがけ処理期間
1989年	1か月処理 定植時から1989年10月30日まで 無処理
1990年	6か月処理 定植時から消雪：1991年3月21日まで 無処理
1991年	6か月処理 定植時から消雪：1992年3月12日まで 1か月処理 定植時から1991年10月30日まで 無処理

(4) 耕種概要

- 1) 定植期 1989年：9月30日
1990年：9月27日
1991年：9月26日
- 2) 栽植様式 畦幅120cm, 株間20cm, 2条植え, 833株/a
- 3) 施肥量 (kg/a) N：基1.0+追0.3×2
P₂O₅：基2.35+追0.075×2
K₂O：基1.0+追0.3×2
稲わら堆肥300
- 4) マルチ 黒ポリフィルム
- (5) 区制・面積 2区制・1区3.9m²

3 試験結果及び考察

(1) 花房数

収穫直前の調査時の花房数は、1989年、1990年とも無処理区より、じかがけ処理区が優り、1989年では6.2本/株で11%、1990年でも6.2本/株で55%無処理区より増加した。また1991年の6か月処理区は3.5本/株で13%無処理区より優ったが、1か月処理区は無処理区と同等であった。

これらのことから、定植後花芽分化期のじかがけ処理によって、花芽分化に有効な5℃以上の温度域の期間が増加し、花芽分化が促進され、花房数が増加したと考えられた。1991年については定植後1か月間は、花芽分化に無効な5℃以下の積算時間がほとんどなかったため、1か月処理区の効果が見られなかったものと考えられる。

さらに、3か年の結果、1か月より6か月処理区の方が効果が高い傾向であったことから、被覆期間によって効果に違いがあると考えられた。

1989年、1990年に比べて1991年の花房数が少なかったが、1991年は、定植後、花芽分化期の花芽分化に無効な5℃以下の積算時間が最も多く、また、ほとんどがシングル花房であったことから、他の2か年に比べ花芽分化が促進されず、花房数が減少したと考えられる。

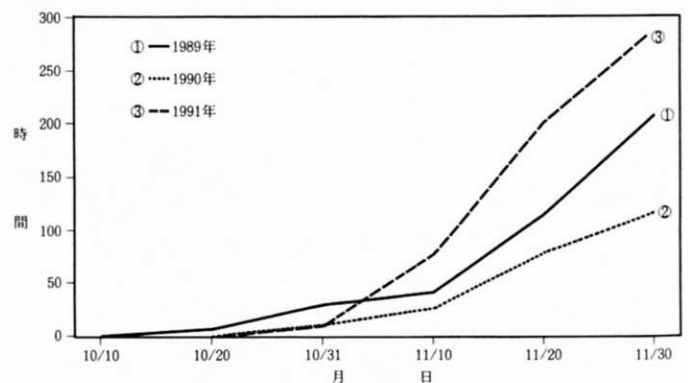


図1 自然条件における5℃以下の積算時間

(2) 生育

収穫直前の生育は、草丈と最大葉の葉柄長は3か年とも無処理区よりじかがけ処理区が4～21%優った。しかし、1か月と6か月による違いは見られなかった。このことから、じかがけの効果は冬期間の寒風害からの保護よりもむしろ、定植時における活着及び生育促進への効果が高いと

考えられた。また、最大葉の頂小葉葉身長、頂小葉葉身幅は3か年とも無処理区、じかがけ処理区で違いは見られず、効果は判然としなかった。

(3) 上物収量

上物収量は、1か月処理区は1989年、1991年とも無処理区よりじかがけ処理区が少なく、無処理区に対して、1989年では254.1kg/aで88%、1991年では148.5kg/aで93%にとどまり、効果は判然としなかった。

しかしながら6か月処理区は1990年、1991年とも無処理区よりじかがけ処理区が優り、1990年は227.1kg/aで45%、1991年は204.4kg/aで29%無処理区より増収した。

以上の3か年の結果から、上物収量はじかがけ期間によって効果に違いが見られ、6か月処理は明らかに増収効果が認められた。また、総収量についても同様の結果であった。

これらのことから、収量に対しては、花芽分化期の1か

月の不織布じかがけでは効果がなく、6か月のじかがけによる消雪までの株及び花芽に対する保護の効果が大きいと考えられた。

1991年は下物収量が大幅に少なかったが、上物平均一果重が16~17gと大きかったことから、同年は2S以下の収量が極端に少なかったためと考えられる。

(4) 上物平均一果重

上物平均一果重は3か年とも無処理区とじかがけ処理区で違いは見られなかった。これは、じかがけの効果は花芽が発達した後、果実の充実期間までは及ばないためと考えられた。

上物平均一果重については、じかがけ処理よりも年次による変動の方が大きく、特に1991年は、花房数が少なかったことに加え、5~6月の気温が1989年、1990年よりも2~3℃低く、充実期間が長かったためと考えられた。

表2 収穫前の生育調査

年次 (調査日)	不織布の 被覆期間	最大葉の生育				
		葉柄長	頂小葉 葉身長	頂小葉 葉身幅	草丈	花房数
		cm (%)	cm	cm	cm (%)	本/株 (%)
1989年 (’90.5.31)	1か月	32.0(107)	11.3	8.3	43.3(104)	6.2(111)
	無処理	30.0(100)	11.5	8.6	41.5(100)	5.6(100)
1990年 (’91.5.31)	6か月	30.1(109)	9.9	7.4	40.0(106)	6.2(155)
	無処理	27.6(100)	10.1	7.6	37.7(100)	4.0(100)
1991年 (’92.6.3)	6か月	22.2(112)	9.9	8.7	32.1(109)	3.5(113)
	1か月	24.0(121)	10.1	9.8	34.0(116)	3.1(100)
	無処理	19.8(100)	9.7	8.8	29.4(100)	3.1(100)

4 まとめ

以上のことから、当地の気象条件では、露地栽培の「ベル・ルージュ」において、定植後から不織布をじかがけすることによって、花芽分化期に5℃以上の花芽分化に有効な温度域が確保され、花芽分化が促進されると考えられた。さらに、その効果は、定植後1か月だけよりも消雪までの6か月のじかがけの効果が大きく、11月以降の保温も大き

く影響していると考えられた。

また、6か月のじかがけ処理は、冬期間の寒風害から株が保護されているため、花芽の保護及び発育にさらに効果があり、その結果、収量が増加すると考えられた。よって、花芽分化、収量増加の促進に最適なじかがけの期間については、定植後にじかがけした後は、継続して被覆しておく方がよく、翌春の消雪までがよいと考えられた。